

学生のための NGO

中大「IFN」の主導で船出

この夏、「学生とNPOを結び」というコンセプトで、NPO団体・IFN（Intermediary For NPO）が中大生主導のもとで新たなスタートをきった。その皮切りのイベントに、中央大学市ヶ谷キャンパスで「学生のためのNGO基礎講座」を開き、会場は外の暑さに負けない熱い雰囲気にも包まれた。（学生記者・中西 奈緒、竹平 道郎）

このIFNは98年、「社会とNPOを結び」というコンセプトで、市民・企業の間立ち、相互の理解を深めたり、協力関係を促すことを目的にスタート、日野、八王子周辺地域のNPOを紹介するリーフレットの作成、学生向けシンポジウムの開催、全国規模のNPOの委託事業を手掛けたりしてきた。しかし、自

分の仕事に追われていくうちに、「自分たちが何のためにNPOを支援しているのか」という疑問の壁にぶつかったため、改めてIFNのコンセプトを見直すことになった。

IFNが他の団体と違うところは何か。それは学生がやっているという点だ。大人と同じことをやるのと背伸びしたところで、できることはタカが知れている。それならば「社会の中で一番伝えやすい層である

「学生」に特化した活動をしよう」という結論に達した。これを柱に皆で学べるような企画づくりを心掛け、それまで欠けていた「自らも学ぶ」という姿勢に改めることにした。

6つのNGO に講演を依頼

そこで新たなコンセプトの下で、「学生のためのNGO講座」を7月30日から8月2日までの4日間、市ヶ谷キャンパスで「国際協力NGOセンター」「ピースウィンズ・ジャパン」「地雷廃絶日本キャンペーン」「ワールド・ビジョン・ジャパン」「シャプランール」「日本フォスター・プラン協会」の6つのNGOに講演を依頼した。

例えば、講座3日目の講師はワールド・ビジョン・ジャパンの海外事

業部長・高瀬一使徒氏。同氏は約40カ国、120以上の支援活動に関わる経験を持つ方で、現在はケニアやバングラデシユなどの途上国で、災害で生活基盤を失った人々や地域紛争に巻き込まれた人々を援助している。今回はルワンダの難民支援活動について話していただいた。

まず、「難民生活は水、食糧、衣服など、すべて外からの援助に頼らざるをえない状況にある。そこで緊急援助ということで、国際的なNGOが現地で活動する」と訴えた。

高瀬氏は実際に現地で実際に配られた支援物資を手にしながら、話を続ける。中国製の農具、大小の鍋、麻のような布……。日本ではあまり大切なものとは意識されないが、どれも現地では生活必需品であることに気づく。

高瀬氏の話のボルテージが上がるに従って、いままでは遠い国だったルワンダとの距離が一気に縮まってきた。「7割ぐらいの子供が、両親

「知る」から「始める」へ

NPO・NGO 広く社会のために活動する民間組織。企業のように利益追求はしない。非営利を強調する場合はNPO（非政府組織）、国際性を強調する場合はNGOと呼ぶ。



熱っぽく、学生にエールを送る NGO の講師

が殺される時の悲鳴を聞いてトラウマ状態になっている。この子供たちはなかなか笑いません。微笑みを失った子供たち——ルワンダの難民問題は、民族間の紛争によって生じた悲惨なものである。

では、NGOにはどのような人物が求められるのか。高瀬氏は「自分に何ができるかを考え、知識や技術を身につけていくことが大切だ。常に必要とされるのは無給でも何かをしたいという『ボランティア・スピ

リット』である」といわれた。

高瀬氏の話聞いた参加者はどう感じたか。「IFNという学生団体をどう思ったか」という記者の質問に対し、中大総合政策学部の4年生は「自分も学生団体に属しているが、地道な行動を続けていくことこそ大

相手の気持ちを考えることが大切

最後にIFNの代表である、高井彩さん（経4）にいろいろ聞いてみた。

——IFNの活動を通して学んだことは？

「NPOやNGOの活動は信念や情熱だけでは実行できないことが多いんだなと思いました。矛盾もあるし、地道な活動ばかりです。また、常に私は人に伝えることの難しさを痛感しています。NPOやNGOの概念は日本から出てきたものではないし、まして今後の成熟した福祉社会的な考え方なので、いまの段階ではまだ受け入れられにくいものだと思います。そして、自分の考えを相手に受け入れてもらうには、こちらから相手の気持ちを考えることが大切だという発見もしました。」

——将来、NPOやNGOに関わっていく考えは？

「一生かけてやっていきたいのです

切だと思う」とのコメントだった。

また、慶応大学商学部の2年生は「将来、NGOに関わっていきたいか」との問いに、「NGOへの就職は考えていないが、一般企業に勤めながら、企業とNGOのパートナーシップを作っていきたい」と答えてくれた。

が、NPOやNGOの枠にとどまらない自分でありたいと思っています。NPOにこだわらないけれど、NPOにこだわらぬ……。まずは企業で修行したいですね。私は金融関係の企業に就職が内定しているのですが、それをNPOに活かせたらと思っています。」

——NGO講座の参加者に何を期待しますか。

「自分にもできるんだという意識を持って、是非ともその後の活動になげしてほしいと思います。あくまで私たちはきっかけを提供するだけの存在ですが、同じ関心を持つ人たちと共感してもらえたら、このうえない喜びです。今後のフォローとしては、その人たちが次につなげる活動のきっかけ作りとして、NPOやNGOへの学生の有償・無償ボランティアを派遣する方にも、力を注いでいきたいですね。」